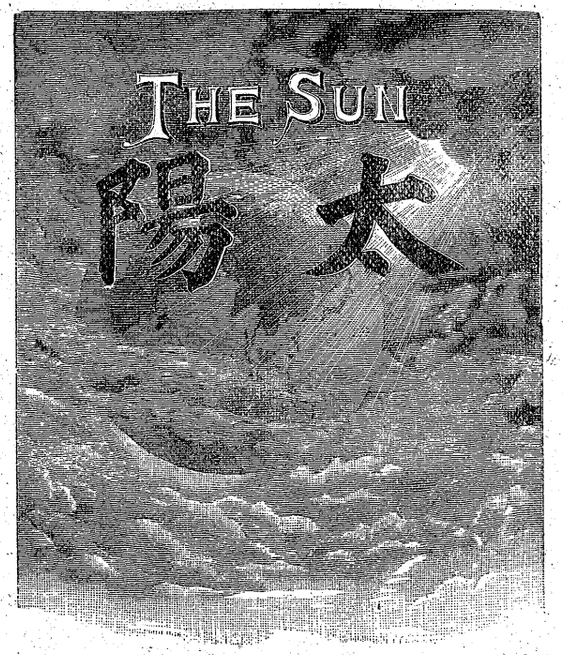

第壹卷

第壹號

明治廿八年一月五日發行

紀元二千五百五十五年佛曆二千八百四十一年
西曆一千八百九十五年　清曆光緒二十一年

廿八年一月

大祭祝日	日曜日	小寒 五日後十時
四方拜 一日	六日	大寒 廿日後三時
元始祭 三日	十三日	滿月十一日後三時
新年宴會 五日	二十日	新月廿六日前六時
孝明天皇祭 廿日	廿七日	陰曆元日 陽曆一月廿六日

廿七年一月中重要記事

○皇后陛下東京養育院新築費二千圓を賜はる
○御講書初に細川本居川田の三人各進講せり
○御歌會始に詠進せしもの一萬二百五十九首
○東宮殿下は沼津に兩皇女殿下は大磯に行啓
○齋藤農商務次官罷め金子堅太郎氏之を襲ぐ
○内務大臣各地方官を招集し選擧會議を開く
○五縣知事の任免あり貴族院より二人拜命す
○農商務大臣後藤伯罷免樫本樞密顧問官襲任
○渡邊内務次官罷め松岡康毅氏其後任となる
○發行停止を被りし者新聞九種雜誌二種あり
○大谷法主末岡博士永峯佐賀縣知事辻男逝く

太陽の發刊

一陽復歸して萬象維れ新に、煕々たる明治二十八年の新旭光は至渥甚深なる　皇恩の下に生等をして同胞四千餘萬の愛讀者諸君と共に紙上に相見るを得せしむ。何の幸か之に加へん。生等斯新旭溫に照らすの時に於て斯『太陽』を發刊し、大に從來の事業を革新擴張せんとするものは、抑も故なきに非ざるなり。請ふ其微衷の存する處を述べて江湖諸君の贊成を仰がんとす。

一昨二十六年三月、家父佐平、廣く歐米支那各國を歷遊し、新聞雜誌書籍出版業の現狀を視察し、大に得る所あり。歸朝の後、彼邦に讓らざるべき大雜誌を發行せんと計畫したるも、時既に歲晚に迫りて之れを決行するの暇なく、已むを得ず本年を期したりしが、昨年六月日清開戰の事起りしより、事缺頗る大なるを以て日清戰爭實記を發行せり。幸ひに其の發賣高は望外の結果を生ち、第一編は二十三版を重ねて三十餘萬冊を出だし、第十三編までにして三百餘萬冊の巨額に達するに至る。實に前古無比と謂ふべし。是れ一には同胞諸君が憂國敵愾の氣に富み、意を戰況に注がるゝの致す處なりと雖も、亦文化普く及ぼし、兒童漁樵も尙よく文字を解するの盛運に遭逢せるに非ずんば、如何ぞ能く此くの如くなるを致さんや。故に戰爭實記の需要多きは獨り戰爭に關するのみならず、亦以て圖書の需要全國に遍きに至りしを證するに足れり。

既に我邦にも此無數の讀者あるを知る。生等出版の業に從事するもの、豈舊來の餘習を守りて同胞諸君の渴望を無視するの時ならんや。況んや前年既に計畫する處あり、準備略ぼ其緒に就きたるをや。此に於て大に雜誌界の革新を企て、廣く朝野の諸名士に謀りたるに、齊しく此擧を慫慂し、一臂の勞を假さん事を諾せらる。此に於て從來發行せる二十餘種の雜誌を廢刊し、今年の新天地に於て『太陽』の曙光を放つに至りしもの、決して偶然に非ざるなり。生等奮つて現在の日本に出來得る限りの精力を

太陽規定

本誌一冊（紙數二百頁）金拾五錢
三冊（三ヶ月分）前金四拾五錢
定價六冊（半ヶ年分）前金八拾五錢
十二冊（一ヶ年分）一圓六十五錢
外ニ郵便稅一冊金三錢

◎本誌ハ前金領收ニアラサレバ一切發送セス◎前金相切レ候節ハ直ニ遞送ヲ止ム◎郵便切手ヲ代用スルトキハ五厘又ハ壹錢切手ニ限ル

廣告料
六號活字一行（廿四字詰）二拾錢
五號活字一行（十八字詰）三拾錢
三號活字一行（十二字詰）四拾錢
二號活字一行（九字詰）六拾錢

編輯人　坪谷善四郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　愛敬利世

東京日本橋區本町三丁目八番地（電話三百三番）
發行所　博文館

集注し、素望を遂ぐるに非ずんば斃るとも已まざらんとす。

今や外には征清軍の響ふところに大捷を奏するあり。內には浩然たる正氣の磅礴するところ禁ぜんと欲して能はざるあり。以て三千年來蘊蓄せられたる我帝國の實力は煥乎として發揚し、世界の耳目を聳動し來りて、宇內の一大强國を生ずるの感、中外到る所に反響せんとす。愉絕快絕。今後の同胞四千餘萬は復た深窓に眠るの日本人に非ずして、五大洲中に濶步するの大日本人と爲れり。豈我邦第二の維新を爲す時ならずと謂はんや。

此時に當りて大に智識を世界に求め、我邦文明の眞相を發揮して之を宇內に宏にせんこと、蓋し國民の任務たり。生等は茲に全力を『太陽』に盡し、一方には智識を萬國に求むるの途を啓き、一方には國光を世界に輝かすの端を開き、敢て第二維新の大業を贊助し、以て聊か至渥甚深なる　皇恩の萬一に酬い、併せて同胞諸君の眷顧に答へんとす。而して進んで交を歐米に求め讀者を世界に得んとするには、勢ひ從來固有文字のみに依賴すべからざるは蓋し同胞諸君も知らるゝ處ならん。此に於て最も東西諸邦に弘通せる英語英文を揭げ、彼我俱通の便に供する事と爲せり。

世運の進步は事物を益々多端ならしめ、分業の法隨つて愈々行はるゝに至らしむるは天下の通則なり。故に雜誌の如きも一事一物必ず專門のものを備へざるべからざるは固より論を俟たず。然るに今各種を集めて大成し、專門を合して並陳し、以て相混戰するに至つては、或は文明世界分業の趣旨に背反するの感なきに非ずと雖も、我邦既に發刊する處の各專門諸協會の雜誌の如き、其の記事概ね美を盡し善を盡し、或は海外に比して讓らざるものなきに非ず。但だ之れを讀む人は中外專門の諸家に限りて、未だ江湖に普及せしむるの目的を達する能はざるは生等の遺憾とする處なり。今『太陽』の期する處は普く專門諸大家の力を集め、廣く中外諸人に紹介して以て相互の智見を交換せしめんとするに在り。是我が『太陽』が當代第一流の諸名家にのみ執筆寄稿の勞を請ひ、成るべく趣味多からしめんと力むる所以なりとす。

供給の需要に比例するは凡百の事皆然らざるはなし、出版事業に至りても亦此原則を出づる能はず。讀者愈々多ければ圖書の價は益々廉ならざる可からず。思ふに今や內國に於ける圖書需要の程度は優に戰爭實記數十萬部を購讀するの力あり。海外に對しては日又一日欽仰せらるゝの國運に會す。故に今生等は奮つて江湖に酬ゆるあらんと欲し、從前發行したる諸雜誌に比し、字數は殆んど其數十倍に上り、加ふるに寄稿者は當代有數の名流を以てし、繪畫彫刻製板印刷等爲し能ふ限りの力を盡して我が邦固有の特技を示すにも拘はらず、更に一層の廉價を以て發賣す。之を歐米の同種類なる雜誌に比するに、紙質挿畫或は及ばざる處あるべきも、價格は殆んど其四分一に當るに過ぎず。是れ實に『太陽』の發刊は我邦出版事業の一大進步を表明するを以て自ら任ずる所以なり。

抑も繁舘が明治二十年六月に創業せし以來茲に八歲。孜々營々、諸種の圖書雜誌を發刊し、廣く社會の需要に應じ、聊か聖世文運の進步に資する處あらん事を希望せしに、幸にして江湖の眷遇を辱うし、爾來發刊する處の圖書類四百四十九種一千七百七十二冊。雜誌二十六種千七十九冊の多きに及ぶ。其總計二千八百五十一冊、之を創業以來昨年十二月三十一日までの日數に比算すれば一日一冊餘の新刊を爲したるに當れり。未だ以て世に對し誇るに足らずと雖も、實に是等繁舘が八年間に刊行せしところは、遙に數百年間此業に從事せし者を壓し、加ふるに其一種一冊に於ける部數も少なくして數千部、多きは數十萬部に達せり。而して極めて價格を低廉にし、需要に應じ易きを主として專ら江湖に普及せしめん事を力めたるが故に、我國文運の進步には、蓋し一助の功なしとせざるべし。然れども物多ければ精なり難し。繁舘が出版の多きと價格の廉なるとを以て稱せられしと同時に、或は雜駁蕪穢の圖書少なからざるの評を受く、是れ生等も亦自ら顧みて其然るを期したる所なり。蓋し此業のなほ幼稚に屬し、勢ひ免かるゝ能はざるの致す處のみ。今日以後の社會は復た往來の我邦に非ざらんとす。出版事業獨り依然として幼稚に甘んずるを得べけんや。故に今より諸種の圖書を出版するに、價格は舊に比して倍々廉にし、發行の多種を求めずして斷乎として著作の精良なるを求め、中外諸大家の寄稿に就き、選擇必ず精にし、取捨必ず嚴にし、一意愈々第二維新後の文運を襁益し、兼れて邦人の著作を海外に紹介するの道を開通せんとす。而して一方には全力を擧げて『太陽』に注ぎ、傍らこれに合併すべからざるの『少年世界』を輿して此旭日光を放つの新天地に立たん事を力む。唯憂ふる處は獨力の能く任ずべからざるに在り。然れども當初より進んで今日に至りしものは、江湖諸賢の眷遇に賴る。今よりして更に大成を期するもの、尤も贊助諸賢と讀者諸君との尙一層大なる眷遇を仰がずんば非ず。繁舘が特に天下に告請するところは唯是のみ。

終に臨み中外讀者諸君に一言すべきことあり。我が『太陽』は實に以上縷述せる如くにして第一號を發刊す。然れども事創始に屬し、時歲末に當り、百事整はずして期する處の半を達するを得ず。纔に理想の標本を示して希望の端緒を開けるに過ぎざるなり。二號以下業漸く緒に就くに從ひ、改良を加へ伸張を計り、誓つて眷遇に答へ、進んで素志を達せん事を期す。願はず第一號を以て俄に能事畢れりと爲さず。其度相を皆めずして精神を取り、以て誘掖開導の惠を垂れ給はゞ、啻に繁舘の幸福のみに非ざるなり。

明治二十八年一月

發行者　大橋新太郎謹識

論說

學界の大革新

久米邦武

記者曰、君字は土城易堂と號す、肥前佐賀の人なり、太政官書記官修史局編輯官等に歷任し、後に帝國文科大學に教授たり、明治六年岩倉大使等の一行に從て米歐二洲に遊ぶ、大使の米歐回覽實記は多く君の手に成ると云、方今職を辭して著作に從事せられ、其史學上の所論は多く史海等に出でゝ人に知らる、時務を知るは後傑の事也、而も時事に通せざれは以て當世に處す可らす、茲に政治學術社會百般の事に關し時事に痛切なる問題に就て、朝野名流大家の卓拔精到なる議論を揭く、

泰東文明の原地たる清國は、無名の師を起してあへなく滅びんとす、學者社會は如何なる感情を以て見聞するにや。昔晉に五胡の亂起らんとする時、祖逖といふ人は夜半に雞の鳴をきいて、同宿の劉琨を呼起し、是は惡聲にあらずといふて起て舞へりといふ。雞の宵鳴にて世の多事になるを知るとは、其は陰陽占驗の迷信、今清の滅びんとするは、智者にあらぬ人にも隱れはあらじ。但合戰をのみ曉々といひはやすは俗人の事なり、學界より見れば、是兵學てふ殺人器械の運用を講究する一科學の事のみ。古は兵を刑法の一科となし、大刑は甲兵を用ひ、原野に陳すといへり。其如くに犯人なければ用ふる所なし、清軍を破りて國都に打入るまでは軍人の責任なれど、扨其後こそ多事となるべけれ。社會の發達に從ふて、分業專科の岐はいよ〳〵繁くなりぬれば、各業各科を修めたる面々は、今にも泰東の將來に種々の望みをかけて、其用意をなすと肝要なるべし。

取分けて警省を促したきは、教育家文學家にて、殊に泰東の文明を講究する人には、此清國の滅亡につれて、大變革の時期こそいよ〳〵到來したりけれ。支那は泰東文明の先導者なれば、泰東人の智識には其分子の染點したると夥多し。然るに清の[illegible]體を見よ、仁義を滅し、禮信を沒し、只愚闇なる譎賢をのみ用ひ、官吏は盜竊の臆病漢、將士は獷獰の野蠻にて、惡徒無賴を驅つて戰鬪をなし、卑屈暴慢臭穢汚濁を備へ、人に鼻を掩み耳を掩はしむる程に腐敗したり。其氣風を崇信したる韓民の昏惰は、殆ど國をなすに足らぬ歟と疑はる。泰東の文明にかゝる分子を含有するにやと思へば、吾も衣を拂ひ身を振はして、若しや傳染してんと、厭忌の念は彼の一敗一敗につれて甚だしく、支那といへば犬打童まで野蠻の國と嫌へば、唐虞三代孔子の道も信用を失ふたるに相違なし。去ながら學理は國の興廢に關するものに非ず、印度は滅びても佛敎は衰へず、猶太は滅びても基督敎は益盛んなり、希臘羅馬は滅びても其文明は永く講究せらる、敎學は只其講究發揮する人の如何によりて存滅をなすべきなり。余は竊に恐る、支那の文明を講ずる人の時に從ひ發揮する所なく、清の政治と相提挈して、同じく斷滅に歸せしめやせんかと。

我軍は方に勝に乘れば、人々みな思へり、日本は淸淨の國なり、廉潔の民なり、愛國の心厚く、義俠に富み、武勇にして物の情れを知るなとゝ、かゝる自稱の譽詞は慢心の發露にて、學界には排除せられたり。要ずるに日本も同じく支那の文明に照されたるに相違なし、同じ氣習の國にて、一は興り、一は滅ぶ、是まさしく道理は人の發揮する如何により盛衰をなす、的切の比較例を眼前に示したるにて、學者はよろしく其然る所以を熟考すべし。明治以來の政治と社會との變化は、上下の習慣に大衝